

WOLF GUY 2

NON NOVEL



ウルフガイ・シリーズ 2

平井和正 狼の怨歌





NON NOVEL

『ノン・ノベル』創刊にあたって

『ノン・ブック』が生まれてから二年一ヵ月、ここに姉妹シリーズ『ノン・ノベル』を世に問います。

『ノン・ブック』は既成の価値に「否定」を發し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

『ノン・ノベル』もまた、小説を通して、新しい価値を探っていききたい。小説の「おもしろさ」とは世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが『ノン・ノベル』は、この新しい、おもしろさ「発見の営みに全力を傾けます。ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—31

ウルフガイ・シリーズ③ 狼の怨歌

昭和50年7月1日
昭和57年4月1日

初版第1刷発行
第18刷発行

定価 680円

著者 ^{ひら い かず まさ}
平井和正
〒177 東京都練馬区石神井台5-17-16

発行者 伊賀弘三良

発行所 ^{しょう でん しゃ}
祥伝社

〒101 東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル
☎ 03 (265) 2081

印刷所 堀内印刷

製本所 石坂善新堂

ウルフガイ・シリーズ 2

平井和正 狼の怨歌



NON NOVEL

祥伝社

狼の怨歌

4

目次

あとがき

253

カバー・本文イラスト……おうらいのりよし牛頼範義

爆音が轟いた。

北極圏の雪原を震わす飛行機の爆音だ。

不吉な赤い巨鳥のように、飛行機は低空で狼の群れの上へ猛然と突っこんできた。

鋭い銃声がたてつづけにはじけ、二頭の狼が雪原に転倒し、狂ったように身をもがいた。

狼たちは蜘蛛の子を散らすように散開して逃走に移った。ジグザグを描いて、しなやかに身をおどらせ逃げる狼たちの周囲に、銃弾が小さな雪の噴煙を吹きあげる。

機上のウルフ・ハンターの放った銃弾が、三頭めの狼を射ち倒した。

少年は叫び声をあげて藪からとびだし、走り寄った。

少年の大好きな老いた牝狼が殺られたのだ。

純白の雪原を朱に染めて、牝狼は身体を掻き立てていた。すでに黄色い目はどんよりと薄膜に覆われ、生の光

を失っていた。

少年の胸郭をこじあけるようにして、怒りと悲しみの絶叫が喉の奥からほとばしり出た。黒い毛深い身体をまもるように覆いかぶさり、少年はありったけの憎悪と憤怒をこめて吠えた。鋭く旋回して舞い戻ってくる赤い飛行機に、威嚇をこめて小さな握り拳を振り、あらんかぎりの怒りを投げつけた。

おれは人間を憎む！ 心の底から憎む！ くそつたれの人間どもめら！ きさまらの卑劣さ残酷さを、おれは忘れないぞ！ 絶対に忘れるもんか！

思惟は激烈な怒号と化して荒れ狂う。

おい、やめろ、やめろったら！ なぜ殺すんだ！ やさしい狼たちをなぜ殺すんだ！

狼たちは、きさまら人間どもに、なにも悪いことをしてやしないじゃないか！ おい、やめろったら、こん畜生！ たった五十ドルぼっちの金めあてに、狼を皆殺しにする気か！ 恥を知るがいい！ きさまら絶対安全なところから、無抵抗の狼を虐殺するのか！ 殺戮をたのしんでやがるのか！ サディストの外道！ 悪鬼め！ おれは人間を憎悪する！ 赦すもんか！ こんりんざい

赦してたまるか！

「ストラップをもっときつく締めて……鎮静剤を注射」

と、だれかがしゃべっていた。

鉄のベッドが苦しげにきしんでいた。身体をベッドに拘束している頑丈な革ベルトが、いまにもひきちぎれそうだった。

注射針の尖端が、腕に突き刺さった。

「このふんどと、まもなく意識を回復するかもしれん」

と、声がいった。

「信じられないような生命力ですね、先生。百十六時間にわたる脳死状態から回復するなんて……」

と、別の声がいった。

2

少年……大神明の脳神経細胞は、死から脱出したばかりであった。いや、その形容は正確ではないかもしれない。

ある種の桿菌かんきんの芽胞ほうは、数百年間にわたって活動を停止していることがある。そんな場合、生と死の区分はきわめて曖昧あいまいなものになる。生と死の中間の状態というべきだろうか。

生体が死亡したとき、数十分後に有機質の分解がはじまり、腐敗が進行する。が、いったい、いつ、死亡したのか、正確にいいあてることがはだれにもできない。

臨床医による死の判定は、だいたいにおいて、自然呼吸の停止、心臓の停止、瞳孔反射反応の停止という程度で行なわれてきた。まれに、その定義にあてはまらない例もあり、蘇生する者もいる。

そのため、埋葬に関する法規に、死後二十四時間、死

体の処理を猶予する規定がつくられたのである。

脳は、人間の身体器官中でもっとも酸素欠乏に弱い箇所だ。心臓停止によって血液の供給を絶たれると、数分で脳細胞は死滅し、分解がはじまる。それが、脳死という死の認定を生んだのだ。

しかし、脳皮質が死んでも、脳幹は生き残っている場合もある。心臓移植手術においても、真の脳死はなにかという問題が、ひとつの争点となったほどだ。

皮質脳波計では脳死が判断できず、脳幹脳波計を必要とするのだが、動物実験では可能であっても、人間についてはほとんど開発されていないのが現状である。

結局は、昔ながらの死の判定にたよるほかはないのだ。

すべての診断は、死を認定しているにもかかわらず、死後の分解が進行しないという状態をどう判断すればいいのか。

死と仮死……生命活動の停止と一時停止を区別するものはなにか。

手術台上革ベルトで拘束された少年の異常な死体は、医師に難問を突きつけていた。

少年の肉体における生命活動は、一時停止からゆるやかな進行に移り、加速をつづけ、奇跡の復活を、医師の眼前に展開した。

林立する心電スコープ、血圧計など計測機器に包囲された手術台上で、少年はすべての生命現象を力強く展開していたのだ。

意識はまだない。

自分を見おろす医師たちの異様な、目から上だけをのぞかせた巨大なマスクに覆われた顔を、少年はまったく認識していない。

とうの昔に死亡して、重油バーナーの炎で焼かれ、死灰と化したはずの自分が、なぜこうして生きているのかと疑うことは、まだずっと先である。

ふたりの医師は、異常に興奮しきって、眼前の少年の肉体に生じた奇跡に目を奪われていた。

「石塚君、きみは幸運な男だ」

と、でっぶり肥った年長の医師が、ぎょろりとした目を狂熱的に光らせ、声を震わせた。石塚と呼ばれたもうひとりの医師は、長身のひょろっと痩せた男である。

「石塚君、きみは新しい医学の夜明けに立ちあっている

のだ。わかるか？ われわれはいままさに、人類の不死という輝かしい医学の勝利に向かって、第一歩を踏み出したのだ！ 見るがいい、この少年は、完全なる〈死〉から脱出した！ その不死の秘密をわれわれが解明したときこそ、人類は死神の鎌から逃れ、不滅の生命をもちとることができる！ わたしは、いま非常に感動しておる。なんといい歓喜か。おお、歓喜、歓喜！ わたしは涙をとどめることができるのだ」

ぎよろつとした目玉から感涙がだらだら流出し、マスクの内側へ水路を作っていた。

「そのとおりです、大和田先生。まったくそのとおりです」

長身の医師はやや大仰に共感の意を表し、ものなれた手際で、ガーゼに小肥りの医師の感涙をしみこませた。

手術時に、術者の発汗をふきとる仕草そのままだ。

ぎよろ目の医師は声をつまらせていった。

「わたしが医師として、最初の患者を死神の手から奪還したとき、わたしはこらえきれずに涙を流してしまったものだ。口さがない他人は、わたしを感激家と呼び、あるいは派手に泣いてみせる役者とそしる。だが、わたし

は生命がいとおしくてならんだ。ひとつの生命が健気に死と闘い、ついにはうち勝つを見るとき、わたしは途方もない感動に心身を包まれてしまう。わたしは自分の感動に対して率直であるだけなのだが……」

「先生は偉大です。医務家として偉大であるだけでなく、偉大なヒューマニストです」

と、長身で瘦身の石塚医師は、臆面もなく讃辞を述べた。分厚い近視鏡のレンズの内側で、目が落ちつきなく動いている。

「ありがたい、石塚君。きみの真摯な讃辞にはいつも感謝しておる。しかしながらだ、いまはいたずらに名誉心や虚栄にとらわれているときではない。真の医務家としての道をまっしぐらに進むのみだ。世の中の愚物どもは、人権だ道義だとたわごとをいいおって、つねに医学の進歩を妨害しおる。真に医学の進歩に貢献している人々を、人非人呼ばわりし、悪徳医師とのしる。ガノールをはじめて人体解剖を行なったときも、パストゥールやコッホが細菌を発見したときも、無智蒙昧な輩から猛烈な迫害を受けた。畢竟、世の馬鹿どもにかかりあっているのは、偉大な事業はなにもできないのだ。わたしはや

る。断乎^{だんこ}としてやるぞ。石塚君、きみはわたしに最後までついてきてくれるか？」

「おっしゃるまでもありません。ぼくは先生と一心同体ですから」

と、すかさず石塚医師。

ふたりの医師は、両手を取りあい感動をわかちあった。

「真に医学の進歩に献身するものが、悪徳医師と呼ばれる。なんというくだらなさだ。本当の医者であるならば、ひとりの患者を犠牲にしても、百人の生命が救えるとあれば、なんのためらいもないはずだ。いや、あつてはならん！ 実験を禁止された科学者はなにもできんではないか。医者にとって人体ほど最高にして最適の実験^{実験}体はないはずだ。それを、人体実験はおろか、動物実験すらも禁止せよという馬鹿どもがおる！ なんとる愚昧さか。わしは馬鹿どもの作りおった法律など認めんぞ。愚かしい法律の手枷^{てがが}足枷^{あしがが}をうち砕いてやるまでだ！」

ずんぐりした大和田医師は、激昂してマスクをもぎとり、狂熱的にこぶしをうち振りながら怒号しはじめた。マスクの下から現われた、ちよび髭^{ひげ}をたくわえた顔は、

ヒトラーに酷似した風貌をそなえていた。

「悪徳医者、生体実験者、なんともいうがいい！ わたしはなにものをも恐れぬ。真の勇氣をもって、不滅の生命に通ずる扉を押し開くのだ。人類の未来をかちとるのだ。わたしほど人類をこよなく愛している者がいようか？ わたしは、自分の生命すら医学の進歩のために惜しみなくささげる者だ！」

激した感情のあまり、息をはずませていた。手術台上に眠る少年をくいいるような眼光で見おろす。

「どうしてもやらねばならぬことだ。決心はきまっておる。わしはこの少年を生体実験のマテリアルにする！

必要とあれば、生体解剖も辞さぬ！」

荒あらしい語気でいきった。小肥りの顔に狂気の形相^{けいさう}が浮かびあがってきた。それは、ある理念に憑^よかれて悪魔の所業をはたらいた人間との相似をさらに強めるものだった。

無心の赤ん坊のように、手術台上に全裸の肉体をさらし、少年は昏睡をつづけていた。

フライトをしらせるアナウンスが、英語と日本語で繰りかえされ、空港国際線出発ビルのロビーは騒然と人が動きはじめた。

ルポライターの神明は、渡米する青鹿晶子を見送ろうとしていた。

青鹿は、まだ病みあがりの気配をただよわせていたが、態度は落ちついていて、旅行用の黒いスーツを身につけて、喪服の若い未亡人の矜りのある美しさを感じさせた。

「そろそろ時間です。では、青鹿先生、ご無事で」

と、神明は足許の旅行ケースを拾いあげ、青鹿に渡そうとした。青鹿晶子が握手の形に右手をさしのべているのを見て、あわてて左手に持ちかえる。

青鹿は、しっとりした膚触りの手を、神明の掌中にゆだねた。

「あなたのしてくださったことすべてに對してお礼申しあげますわ」

と、感謝のにじむ声音でつぶやく。

「決して忘れません」

「あちらのわが同胞によろしく。狼たちは、きつとすぐにあなたが好きになりますよ。あなたには実績がありますからね。このほくが保証するんだからまちがいない……いつかまたお逢いできるといいですな、先生」

青鹿のしなやかな手をはなすのが惜しかった。ややぎこちなく手をほどき、左手の旅行ケースを渡す。

青鹿はしとやかに一揖し、それから過去のすべてと訣別するように、思いきりよく背を向けて乗客通路の人波に踏みこんでいった。通関のドアの向こうに姿を消す。

ちよつとうつろな気分を味わいながら、神明は混みあうロビーにたたずんでいた。

生涯にただ一度きりのすばらしい絵を描いて、それをすぐに失くしてしまい、二度と見る機会がない……そんな気分だった。

ひょっとすると、惚れていたのかもしれない。気だてのいい、すばらしい女性だった。この一週間、ボデ

イガードとして身近につきあつてみて、それがよくわかった。男を生命がけにさせるようなものが、青鹿晶子にはあった。

傷心のひしがれたような、頼りなさにぐっとひきつけられたせいかもしれない。いつもそうなのだ。狼の発達した保護欲のためか。

それに、喪服を着た若い女というのは、格別に美しく見えるものなのだ。惚れたとしてもふしぎはない。よせやい。

神明は痩せぎすの顔に苦笑を押しあげた。おもむろにハイライトをくわえ、紙マツチで指先を焦がしながら火をつけた。

くるりと振りかえると、神明はロビーを横切つていった。くわえタバコの顔には、悪戯っ子のような笑いがはりついている。

ロビーの片隅でスポーツ新聞をひろげ、立つて読んでいる男の前で足をとめた。新聞にかくれて男の顔は見えない。

神明はタバコを口からむしりとると、なに気なさそうに、新聞紙にタバコの火口を押しつけた。ジリジリい

らっぽく紙が焦げ、ちょうど男の顔の目のあたりの部分に、縁の焦茶色に変色した孔があいた。

「こら、なにさらす」

男はうなづいて、手荒らに新聞をひきおろした。長いもみあげのヤクザっぽい顔が現われた。三白眼の凄みをきかせた顔だ。

「やあやあお見送りご苦労さん」

と、神明はなに食わぬ顔でいった。

「まもなく無事に出発するよ。あんたがたの手のとどかないところへな。お気の毒さま」

ヤクザはすごい目つきでにらみつけたが、神明はいつでもに気にしなかった。

「さつさと帰つて親方に報告したらどうだ？ カモは飛び立つちまいましたとな」

「おどれなんか知らんで」

「とぼけるなよ。こないだうちから一生懸命尾けまわしてたくせに。早く神戸へ帰んなよ、山野組のあんちゃん」

「おちよくるなこら、どづいたるか」

ヤクザの顔がどす黒く変色した。威嚇的に手をポケッ



トにすべりこませる。神明は嘲笑を浴びせた。

「空港警察を呼んでやろうか？ 連中の金属探知器はすごく性能がいいという評判だ。銃砲刀剣類等不法所持でご利用になるぜ。どうせ物騒なオモチャを持ち歩いてるんだらう？」

と、乗客通路に立つ警官に顎をしゃくる。

「去ね！ 去にさらせ！」

男は小声で鋭くいった。身体を硬直させ、三白眼は憎悪に燃えていた。

「おぼえてけつかれ」

「これから警視庁へ行つて、あんたの名前を調べてこようか。どうせ暴力団の写真台帳にのつてるだろうからな。あばよ、山野組のあんちゃん」

男の凶暴な目を背中に受けて、神明は国際線ロビーを出た。くだらないことだが、これですこしは気が晴れた。

関西弁のヤクザが山野組の組員であることはまちがいない。

山野組としては、関東制圧の拠点、東明会を壊滅させられたことを、相当根にもっているのであろう。その

点、いち早く青鹿晶子を国外に出してしまったことは正しかった。いかに日本一の暴力団山野組でも、アメリカ合衆国までは手が届くまい。

神明は、自分の身については、あまり心配しなかった。今後、どこかで山野組とぶつかったら、むろんただではすむまいが、トラブルは彼の商売である。

むしろ、刺激があつておもしろい。

国際線出発ビルを出がけに、ロビーのヤクザを振りかえったとき、ふいに柔らかな身体が胸許につきあたってきた。

若い女の子だ。

「し、失礼」

ほっそりした身体つきの、髪を長くした娘である。エクスセントリックな目の光の強い、猫みたいなたぷらな目が印象的だった。夜の山火事のように真っ赤なパンタロン・スーツを着ている。思いきり奇抜な大ぶりのトンボメガネを前髪にはねあげている。

神明は眉毛の両端を垂れただらしない笑顔を赤いパンタロンの娘に向け、駐車場に歩いた。

駐車場には、灰色のブルーバードSSSが彼を待って

いた。

車を出し、高速一号線にのせる。

肩の荷をおろした気分であることはたしかだった。ボディガードは気の張る仕事だ。

が、まんざら楽しくないこともなかった。どんな場合でも、美しい女のそばに居るのは楽しいものだ。

いずれそのうち、機会があったら、青鹿晶子が落ちついたかどうか見にいってやろう。青鹿はコロラド在住のウルフマン、ジェファースン夫妻のもとへ身を寄せることになっている。もちろん山本勝枝が世話したのだ。

彼女はそこで、十二頭の灰色狼と暮らすことになる。狼たちにやどる大神明の面影が、青鹿の心をなぐさめるだろう。一度、狼の野性の神秘に憑かれた者は、二度とはなれられなくなるのだ……

神明はブルSSSをとばしながら、やや気落ちした思いをまぎらそうと、そっと口笛を吹きはじめた。

いっそのこと、おれも青鹿晶子に同行して、渡米しちまえばよかったと考える。きつと楽しい旅になったろう。コロラドの広大な自然の中で、野性味たっぷりの生活を……

だが、おれはじきに平穩無事な生活に飽きちまうだろう。なにしろおれは都会育ちの狼ときてるんだからな。

彼はゴミゴミしたほりっぽい都会が好きなのだった。押しあいへしあいして暮らす人間たちが好きなのだ。ひっきりなしにおしかけてくるトラブルの数々をむかえ討つのが格別に好きなのだ。トラブルのもたらす、荒っぽい刺激と緊張感を愛しているのだった。

持つて生まれた性分というやつだろうか。もともと冒険家として生まれあわせたんだろう。だから、青鹿晶子との静かな生活は、おれをデクデクに肥満したまぬけ狼に変えちまう。おれはそれを恐れたんだ。

どんな女も狼男と生涯をともしるのは不可能だ。どんなすばらしい女でも、そいつばかりは不可能というもんだ……

そのときだ、いきなり声が聞こえたのは。

「あんたに話がある、神明君。おっと、そのまま車の運転をつづけたまえ。よそ見運転は事故のもとだ」

だれもない車内に他人の声を聞いたのだ。神明が泡を食ったのは当然である。反射的に振りむいて声の主さがし、ハンドル操作を狂わせてしまった。車が大きく

蛇行し、ガードレールに接触しかけ、あわててハンドルにしがみつく。

「さがしてもむだだ。わたしを見つけることはできん」

声の主は、彼の醜態ぶりを見ていたようにいった。

「だれだっ」

誰^{だれ}何^{なに}せず^ずにいられたかった。

「どこにいるんだ？」

「神明君、あんたと取引^{とりひ}きがしたい。このまま車を運転して、紀尾井町^{きおいちょう}のホテル・オータニへ行きたまえ。フロントで名前^{なまえ}を名のり、八一二号室のルーム・キーを受けとり、部屋へはいるのだ。そこであらためて連絡することにする」

「どこだ、どこにいるんだ。どこからしゃべっているんだ」

神明は毛を逆立ててわめいた。

「取引^{とりひ}きの内容^{りよう}については、いまはいえないが」

と、〈声〉は、神明の詰問^{じつもん}にはとりあわずにつづけた。

「しかし、ひとつだけ、きみにも関心^{かんしん}のありそうなことを聞かせよう。犬^{いぬ}神明はまだ生きている」

「なにいつ」

神明は愕然^{がくぜん}として叫んだ。ふたたび安定を乱してガードレールへつつこみかけてしまう。

「八一二号室だ、神明君」

それっきり声はとだえた。神明があせってとなりちらしても反応はない。

彼はハンドルから右手をはなし、あわてて身体中のポケットをたたきまわった。

そいつは、上衣^{じょうい}の左内ポケットから出てきた。

細いアンテナを突きだした、ポケットライター・サイズの超小型無線器である。おそらくICを組みこんだ高性能のミニ・トランシーバーだ。これが正体不明の〈声〉のトリックだった。

いったい、いつ、だれが、どうやって？

狼^{ろう}の嗅覚^{きゅうかく}が一時にして解答をもたらした。

あの娘^{むすめ}だ、赤いバンタロン・スーツの。身体をぶつけた、一瞬間^{いつしゅん}の早技^{はやわざ}で、ミニ・トランシーバーを彼の内ポケットにすべりこませたのだ。

あざやかな芸当^{げんたう}だ。ただものでないことはたしかだ。神明の鼓動は速^{はや}まってきた。

ひょっとすると、こいつはとんでもないトラブルの幕^{まき}開き^あかもしれない。

彼はトラブルに對する自分の嗅覺のたしかさを信じていた。いつだって、それははずれたことはなかった。

4

〈声〉の言葉どおり、ホテル・オータニの八一二号室は、神明^{じんみん}の名でリザーブされていた。料金も支払いずみだという。

神明はフロントでルーム・キーを受けとり、ボーイの案内をことわった。このホテルは仕事で何度も使っているから、案内には通じている。

大ロビーは、例によつて種々雑多な人種であふれかえっていた。ターバンのインドの紳士、サリーをまとった美女、大男の黒人、ブレザー姿のソ連選手団などバラエティ豊富だ。しつけの悪い外人の餓鬼^がどもが奇声をあげ、猛烈な勢いでかけまわっている。日本国内の光景とは思えないほどだ。

神明は、プラスチック片のついたルーム・キーをくるくる指先でまわしながら、ロビーを一通り見たした。格別に、彼に對して関心をはらっている人間はなさ